

# 地元ブランド梨守れ

白岡市で特産のナシの生産量が農家の高齢化などで減少している。市外のナシと一緒に流通するようになると、地場産の証である「白岡美人」の名称が使えなくなる恐れも。ブランドを守るため、市は新年度から、柴山地区の農地をナシの耕作地として一体的に整備する「梨団地」事業に取り組み、連携する地元企業は先端技術を使ひ、海外輸出も視野に入れる。(保坂直人)

## 白岡 高齢化で生産量減少



「低樹高ジョイント仕立て」による新しいナシの苗木を紹介するアルファインベーシヨンの芝田直幸さん

■「白岡美人」の危機  
市は市内で栽培したナシを「白岡美人」としてブランド化。マスコミキャタクター「なしべさ」や「なしのん」が応援し、ふるさと納税の返礼品として活用するなど市のシンボルとしてPRしている。ところが近年、市内の選果場を通して流通する白岡産のナシが減少。市外で生産されたナシと共に流通することになれば、「白岡美人」の名称が使えなくなる。

## 企業と連携 「梨団地」整備へ

市が新年度から着手する「梨団地」事業は、農地の貸し借りを促す「農地バンク制度」を活用。複数の農地を集約し、企業や若手と組織的に栽培に取り組み。柴山地区で、隣接する複数の農地の畦を取り除き、約3畝のナシ畑を整備。1070万円を新年度予算に計上し、調査・測量を始め、畑の整備、苗木植えを進め、2030年ごろの収穫を目指す。

### ■栽培は「リスキー」

「梨団地」の中心プレーヤーに名乗りを上げたのは同市下大崎のアルファインベーシヨンの山田浩太代表取締役は船井総合研究所で環境・農業分野のビジネスコンサルタントに就任した経歴を持つ。独立し白岡を拠点に各種ネギを栽培。全国に流通網を拡大し、障害者支援にも力を入れ、独自のビジネスモデルを確立した。「農福連携」を掲げ、売上げを伸ばしている。

白岡の企業として活躍するが、営業先や見学に来る関係者からは「白岡といえばナシでしょ」との声が続いた。地域ではナシの生産者が減り、技術継承が困難な実態を目の当たりにした。

しかし、二つ返事でナシ栽培に参入するわけにはいかなかった。栽培には高度な技術が必要で、収穫は年一回、しかも苗木植えから年数を要する。山田さんにとってナシ栽培は「一年一作、失敗するわけにはいかない。企業にとってリスキー過ぎる」事業だった。

■白岡のナシを世界に  
それでも、ネギの売り上げが増える中、撤退する農家からナシの木を預かり、2年前からナシ栽培に参入した。ナシ部門のリーダー芝田直幸さんは「地元農家、県が応援してくれた」。近隣にナシ栽培に熟知した生産者がいたから「ここぞで来たチャレンジ。何とか収穫までこぎ着けた。」

並行して独自の手法で新たな苗木を植えた。先端技術を導入し栽培の合理化に取り組み。その一つが「低樹高ジョイント仕立て」と呼ばれる栽培方法。枝の高さを低くし、動線を確保することで作業の省力化を見込む。

同社は堆肥化施設の整備など化学肥料に頼らない循環型農業の仕組み作りを展望する。収穫したナシを洋菓子に加工・販売、将来はナシの海外輸出も視野に入れる。

山田さんは「原料を内製化し、無駄なく回していける仕組みを作りたい。埼玉限定、白岡のブランドづくりに貢献し、障害者が活躍できる場をつくる」ことができれば「ハッピー」と目を輝かせた。